鼎談

文教施設は、今後どうあるべきか

長倉 康彦　共立女子大学教授・東京都立大学名誉教授
吉沢 晴行　文部省大臣官房文教施設部技術参事官
佐川 政夫　文教施設協会専務理事

左より吉沢晴行氏、長倉康彦氏、佐川政夫氏

小・中学生の“こころの教育”を含めた学校教育のあり方が問われている昨今、教育環境としての学校建築がどう関わるべきなのか、また文教施設の目指す方向はどこなのかなどについて、それぞれの立場から語っていただいた。

人間性を目指す豊かな教育環境

佐川　はじめに最近の学校建築の傾向と、その進展ということから入りたいと思います。まず私から一言、最近の学校建築は大変な変貌を遂げているような感じを受けています。私共の文教施設協会では10年ほど前から、公立学校の優良施設表彰を実施しています。この制度は、増改築も含めて年間約2,000件近い学校建築が建設されている中から毎年50～60件の学校を選考して表彰するのですが、この制度が始まって以来年々質が上がっていることを如実に感じています。それは、長倉先生が今までタッチしておられました文部省の施策の一つであるインテリジェントスクール構想が定着、浸透し、それが学校建築の設計にいい意味で表れているのではないか、と思います。長倉先生は、このインテリジェントスクール構想の推進には大変お力を尽くしていただきましたので、そのあたりの先生の感想などについてお話し願いたいと思います。

長倉　学校建築は昭和50年頃から変わり始めました。従って、新しい学校が姿を見せたのは、ヨーロッパやアメリカで先行していたけれど、日本では20年前といっていいでしょう。そのコンセプトは、学校で言えば多様化だし、学校建築で言えば人間性を目指す豊かな教育環境ということで、それはもちろん両方対応しているわけです。10年ほど動いているうちに、今までの学校建築では考えられなかった多目的スペースという補助を文部省で始められたのですが、と同時に平成2年にまとめられたインテリジェントスクール構想が、動きを加速させた非常に大きなインパクトになっていますね。学校建築のインテリジェント化のテーマは、人間的で豊かな環境づくり、そして情報化と、もう一つは学校が生涯学習の場であるということ。学校は学校教育の目的のためにあるだけではなく、むしろ生涯学習のためにあるのだということを位置づけたと思います。

佐川　図書館・博物館・体育館などと有機的な連携といったような…。

長倉　有機的な連携をするということは、同じ目的を持つ文教施設であるということですね。それまではそうではありませんでした。学校は学校、社会教育施設は社会教育施設でした。その後、文部省で進められているパイロット研究は、もう20校ぐらいになりますかね。

佐川　そうですね。

長倉　それぞれの研究テーマは情報化ももちろんベースにありますが、生涯学習の場や人間性環境という話がむしろ先に立っています。21世紀の学校を目指す、いろいろな生涯学習施設を造っていこうということですね。しかしインテリジェント化は、一般建築では15年も前からやっているのでキーワードとしてはもう古いという人もいます。けれども学校建築では、まだまだ旗を振り続けていかなければと思います。構想が及んでいない学校建築はたくさん残っていると思うので…。

佐川　確かにそうですね。今で言う複合化という問題、それから地球にやさしいといった環境問題への対応も含めた、自然との調和ということを当時は謳いましたね。他の施策ではちょっとないような大きな施策だと思います。その事に関して吉沢さんはどう感じておられますか。

吉沢　今のお話にもありましたように、長倉先生を中心にしてまとめていただきました「文教施設のインテリジェント化について」が、文部省に報告されたのは平成2年3月です。それを見ますと副題が、「21世紀に向けた新たな学習環境の創造」となっていますが、それについている「創造」という言葉……今までは学校が新しくモノをつくるという観点から、こういう研究をしたことは少なかったと思うのです。それがインテリジェント化の調査・研究では、学習環境の創造ということを言い出し、これが新しいとらえ方となったのではないかと思います。もう一つは、実際の建物を見ると施設が教育に対して受け身の立場にありました。それをこのインテリジェント化の構想では、学習環境を新たに創造するという積極的な立場になっています。先ほどお話がありましたように、学校の建物が非常に新しくさまざまないい形に変わってきているというのは、その原点がここにあるのではないかという気がします。インテリジェント化が情報通信のことだけではなく、もっと広い視野でのスマートな学校といいますか、他の施設との連携といった積極的な面までを取り入れ、ソフト面も取り入れるような形の学校建築を考えたのです。そういうところがこれからを示唆するバイブルになっているのではないかなと思います。そして非常に分かりづらいインテリジェントスクールというもののイメージを関係者の方に具体的に絵にして説明し、関係者の意識変革を導き出したと思います。文部省が先導的に言い出した結果ですが、今のように学校が華々しくいろいろな建物に変わったのは、このような関係者の意識変革があったからで、喜ばしいことだと思っています。

学校建築の複合化と「エコ・スクール」への対応

佐川　文部省は今、一生懸命になってさらなる学校建築の推進を図っていると思うのですが、その一つの発展の形として、先ほどからお話しいただいている複合化があります。学校建築が単なる文教施設との複合化だけではなくもっと大きな意味で、最近は高齢者福祉施設との複合化というところまで話が進んでいるようですが、そのあたりはどうなのでしょうか。

長倉　21世紀のインテリジェントスクールとは、生涯学習に対応するという意味で、美術館や図書館などすべての文教施設が学習者の前に用意されているということが大切で、それが一緒になっていると学習機会も得やすいということですね。複合というのは昔からもあるのですが、ここで必要なのは背中合わせの複合ではなく、それぞれの施設が向かい合っているということです。ですから施設の計画そのものが非常に大事なのです。三つの施設が複合したことで新たな一つの施設ができる、そういう意味の複合です。そして、三つのうちの一つの施設から見れば複合化は生涯学習にとって高機能化、多機能化することになります。学校などはそれが非常に大事だという話になりますね。複合化というのは、文教施設をインテリジェント化していくときの大きな方法です。そして今、佐川さんがおっしゃったように福祉の機能や施設を複合化するという課題も出てきました。かつて平成3年に「複合化について」という指針を出されたとき、確か「文教施設等」で書いたと思います。

吉沢　そうです。

長倉　「等」というのは何かというと、その頃、品川の戸越で福祉施設と学校との複合化計画があったのですが、文教施設を超えてそういう施設を含めることの議論の結果でした。結局、一昨年から特に高齢者施設との課題が出てきたのです。動機は、学校を見ると空いている教室がある反面、高齢者社会についての施設が足りない、との思いがいつもあってそれを合わせて学校の有効利用を考えたらということでした。現在では、学校や学校建築の位置づけを、さらに発展させながらこの課題をとらえるという研究テーマで動いているのです。これは、吉沢さんが指導課長の頃からご一緒して検討させていただいています。

佐川　今の文部省の考え方なり、推進の仕方についてはどうですか。

吉沢　長倉先生がおっしゃられたように複合化に関する研究をしていますが、世の中が急速に発展したため、高齢化、少子化という現象の中で学校の敷地が狙われ始めました。そこで文部省としては、日本建築学会にお願いして長倉先生に主宰していただき、複合化に関する研究をしてもらっています。それで見ると その頃はまだ、実際には文教施設以外の複合化は非常に少なかったのです。先ほど話題になりました社会福祉施設、高齢者福祉施設との合築は全国で13例しかありませんでした。それもちょっとソッポを向いているようなものもあって、実際はまだまだなのかなという感じがしました。しかし、それを調べたということは、文部省が一歩踏み出したということではないかと思います。そしてその時に長倉先生に、合築した場合に両方が悪影響を及ぼさない形はどういうものなのか、など実際の計画・設計上配慮すべき事柄について研究していただいたわけで、今度は非常に積極的な高齢者福祉施設との連携を考えるということで、われわれも今、それを期待している状況です。

佐川　学校の複合化が進むと、新しい意味での地域のコミュニティセンターになり得る、ということも考えられますね。

長倉　学校がコミュニティの中心であるというのは、話題としては古いんですよね。その事例として、選挙の時や運動会の時に学校を使うなどがありました。そのうちに学校の地域への施設開放

長倉　康彦（ながくら やすひこ）
1929年東京都生まれ
1953年東京大学工学部建築学科卒業
現　在　共立女子大学教授／東京都立大学名誉教授／文教施設計画研究所代表

が謳われるようになりましたが、これもまだ学校そのものが地域のコミュニティ施設になったわけではなく、空いているときに使うというぐらいのことですね。そういう歴史はあるのですが、これからは地域の人がそこで勉強もするし、高齢者などの日常的な生活の場がそこにあって、子供たちも影響を受けるし、高齢者も影響を受ける。連携の見えない力が子供たちや高齢者に働くことも期待できる。“こころの教育”という話がありますが、そういうことに寄与すると思います。

佐川　複合化という話が新しい方向に進んでいるのは大変喜ばしいことだと思います。それと同時に今は、地球環境問題が世界的にも非常に大きく取り上げられていますが、地球環境への学校教育の対応について、吉沢さんの方から教えていただきたいのですが。

吉沢　地球環境問題については、建築物を壊すことも含めて建物などは、環境保全にとって非常に大きな位置を占めているという認識がまず必要だろうと思います。これからの学校施設は、環境を考慮して設計、建設、運営され、そして環境教育にも生かせるような施設づくりをすべきではないかということで、環境を考慮した学校施設――これをエコ・スクールといっているわけですが――を造っていこう、と文部省が言い出したものです。それが、今はもう少し具体化のためにパイロットモデル事業を進めている状況です。

佐川　確かにエコ・スクールも、インテリジェントスクール構想の中に完全に包含されたものの一つであるわけですね。

長倉　吉沢さんがおっしゃったように、中身の教育そのものがエコ・スクール構想に繋がるわけですが、それを達成するためのいろいろな手段は、省資源や省エネなど建築計画や建設計画に関わってくる部分があるわけです。それをきちんとやればエコ・スクールの一つの実践になるのです。それもインテリジェントスクールと本当は同じなのです。

新しい時代を拓くこころを育てるために

佐川　今、“こころの教育”ということが問題になっています。学校建築の面でも、新しい時代を拓くこころを育てる視点での施策を考える必要があるのではないでしょうか。

長倉　“こころの教育”ですが、多様化ということは一人ひとりの子供たちの学習なり生活なりが保障される形のものでなければいけないですし、学校もそうならなければいけません。また、学校やクラスが一つの集団に一体化形成されている状況が強すぎることと、子供一人ひとりが個性化・個別化というのは相反することです。今までは一体化の中で子供たちが安定する面だけを考えていましたが、その中にいられない子供がいじめられたり、こころが傷ついたりする面が大きいのです。いじめる方も傷ついているのではないかと私は思いますが。ですから一体化を外して個性化、個別化などのシステムを、もっと強くいろいろな学校で取り入れなければいけないと思います。生意気を言うようですが、学校建築の方ではその備えを造ったのですから、それを利用してもっとやったらいいのではないでしょうか。“こころの教育”を支える学校建築というコンセプトにおいて大きく言うと、日本の社会全体が集団一体型を良しとしてきた社会だから、そこから抜け出るのは大変だと思うのです。われわれは、そういうしがらみの中にいるけれど、やはりそれを外さないと国際化にしろ、創造的な人間を育成することも難しい気がします。“こころの教育”を支える学校建築のあり方という意味では、われわれが旗を振っているインテリジェント化なり、複合化なり、あるいはエコ・スクールの話をもっと進めたいと思うのです。

佐川　学校建築には、すでに“こころの教育”のための下地ができていたわけですよね。

長倉　そうなんです。そのことも含めてこうした動きは“学習形態の多様化が学校建築に及ぼしたもの”というよりは“学校建築が学習形態の多様化に及ぼしていく”方向も必要ということになりますが、その実践を理解して欲しいのです。今ではそれが“こころの教育”のための一部にもなるのだろうと思うのです。学校の中でそれぞれの子供が安定できるようにする。いじめなどはどんな世界でもなくすのは難しいと思いますが、度が過ぎていることに問題があるのではないか、それを少しでも柔らげる必要がありますよね。

佐川　なるほど。

吉沢　長倉先生がおっしゃったことは、環境が教育するという一面をとらえたことだろうと思います。今の中学生を主体にした、また青少年のこころの荒廃に対して文部省としては、もう新聞報道などでご存じの通り、中央教育審議会が“こころの教育”について考えています。まさに“新しい時代を拓くこころを育てるために”として現在審議中です。そこでは、家庭、地域社会や学校を見直そうということになり、教育や先生が非常に重要な余件になるのですが、もう一つは施設の環境も重要ではないかと思います。学校の中で自然を体験できるような樹木や芝生が植えられていて、そこで寝転がったり木に登ったり、生き物について考えることもできる。また、木の教室の中の情操という話もあります。そのような、ゆとりと潤いのある学校環境づくりが重要な要素ではないかと思いますが、これも具体的な話で学校環境が児童・生徒にどのように影響していくか、ということをもう少し研究をすべき今後の課題だと思っております。

写真1：加須市立加須平成中学校（P.87）

吉沢　靖行（よしざわ はるゆき）
1941年神奈川県生まれ
広島大学、九州大学で建築課長を歴任
現　在　文部省大臣官房文教施設部　技術参事官

佐川　そうですね。

長倉　昭和40年代に文部省の中央教育審議会の答申で「期待される人間像」というのがありましたが、先進諸国では当時、オープン・スクールやインフォーマル・エデュケーションなどの動きがあったのに、日本ではすぐにはそういうのは通用しませんでした。あの時点では、建築のわれわれが個性化を図る学習というのは、こういうふうにやるのでは、また、そのためにはこんなスペースがいるのでは、といろいろな試行を進めたのです。最近、福祉施設との複合でも議論したのですが、高齢者との連携というと例えば、何日の何時にクラス全員で一緒にお昼ごはんを食べましょう、という一体型の交流がありますね。それはそれで役に立つのですが、例えばクラスの２人がクリスマスケーキを一生懸命焼いて、複合している施設に持って行ったらすごく喜んでもらったのに、そういうのはいけないと言うのですよ。一体化の中では出過ぎたことになるらしいのです。そんなことを言われたらその子も傷つきますし、貰った方だって傷つくでしょう。日常的な交流連携を図ることのできる複合化理論ということまで十分に検討すべきだとしているのですが。

佐川　そのあたりが問題なのでしょうね。

長倉　“先生は建築の人でしょう、なぜ教育のことに口出しをするんだ”と、ずいぶん言われたことがありますが、福祉――高齢化――社会のコンセプトを把握し、実践することは大切ですからね。

吉沢　“開かれた学校”というのを日本で最初に言い出したのは先生だと思うのですが。確か、私が学校で勉強している最中でした（笑）。やはり学校がコミュニティセンター化して、それぞれの地域住民の方々がそこをよりどころにするような学校施設ができていけば、その対応もしやすくなるのではないかと思います。明治の学校ができた頃は学校自身が地域の拠点でした。その原点にまた戻っていくような気がしますね。

佐川　話はちょっと変わりますが、学校教育に対して建築が先行していると言われる例として、中学校の教科教室型校舎がありますね。最新型のものとして、私共、文教施設協会が基本構想をつくり、教育施設研究所が基本計画・実施設計を行なった埼玉県の加須平成中学校（写真１／本誌P.87）がありますが、これも先ほどの話に出た優良施設表彰を受けたものの一つで、全国から多数の先生方が見学に来られているように今、大変に関心が高く、このような校舎は今後も多く計画されるのではないでしょうか。

大学建築の高度化

佐川　今度は大学の建築に入りたいと思います。今、いろいろと大学自体が変化していますが、大学のキャンパスをさらに豊かに高度化しようという動きが文部省の中であるかと思います。それについて抱負みたいなものはありますか。

吉沢　文部省としては、主体的には国立大学などの施設の整備を行なっているのですが、現在の大学施設は老朽・狭隘化しています。それをなんとか世界に通用するような施設にしていかなければいけないということで、現状の認識をしながら方策をいろいろ考えました。これからは、それに対応した施設環境の整備をしていくことが必要です。また、環境に配慮した施設の整備や、地域社会との連携をきちんと考えての施設づくりも必要であるという基本的な視点ですが、それを具体化すべく文部省では対策を練って今後の施策の中に反映していこうという状況です。

佐川　それはいつ頃でしたかね。

吉沢　平成10年3月の報告です。その前の整備計画のことは長倉

佐川　政夫（さがわ まさお）
1933年北海道生まれ
1957年北海道大学工学部建築工学科卒
元文部省大臣官房文教施設部長
現　在　社団法人 文教施設協会専務理事

先生にお願いしました。

長倉　国立大学については標準的な面積の計算方法があって、その時代時代を追って修正されたり手当てされていますね。整備計画指針ができたところで、いつかもう一度見直しを行なっていただいた方がいいのではないかと思っているのですが。手を入れて、なるべく現代化していく必要があると思います。整備指針についてはずいぶん議論をしました。

吉沢　平成5年頃でしたか。

長倉　日本でも大学の歴史はありますが、例えば広場が非常に大事だという話や外部環境にいいものが日本には少ないという話だったので、外国の大学のいろいろな状況を集めたりしました。この議論の中で会議のメンバーの会社の社長さんや日経の方とか財界人などは、財源の充実、多様化ということを盛んにおっしゃっていました。文部省は民間資金を導入したり、民間施設を活用したり、もっと広い立場で施設整備を考えていかなければいけないなど新しい考えでしたね。国立大学の老朽・狭隘はすごいから、これに立ち向かうにはもちろん国の予算でやるべきところなのですが、それだけでは足りないだろう、という話でした。

佐川　そのあたりの事では面白い話があるのです。私は何度か中国へ行って、大学の人たちといろいろな話をしてきたのですが、中国では大学の施設費も含めて運営費の半分が政府から、残りの半分は自分たちで調達するのだそうです。調達の方法としては、半分のまた半分が海外で成功している財産家が自分たちの育った大学に対して寄付をし、後の半分は自分たちが稼ぐのです。

長倉　そうなんですね。私もいくつか視察しましたが、清華大学では、入口の門を入っていくと左側にビルが建っていますが、そこは公司で大学における企業活動を一手にやる。建築学科の中はCADで埋まっていて、設計の仕事をしているのです。

佐川　日本で言う民間の仕事なんですね。

長倉　設計事務所なんですよ。公司が4分の1を稼ぐんですね。農業大学が農作物を日本などに輸出している例も見聞しました。

佐川　大学の運営方針は三つあり、教育、研究であり、そして、もう一つは社会に対するサービスなんです。そのサービスとは何かというと儲け仕事に対する社会への対価なんです。そこまで徹底しているのです。日本にはない新しい考え方です。

長倉　それが一つの姿かも知れませんね。アメリカにはチャータースクールというのがありますね。つまり、こういう学校を造りたい、というようなことを申告してパスすると、お金は出すが口は出さない。そういう学校があちこちにできています。やがて日本にも出てくる可能性がありますね。

佐川　そうでしょうね。規制緩和の時代ですから、もっといろいろなことが試されてもいいかと思います。

長倉　アメリカでデパートを全部買い取って、それを大学の建物にしてしまったというのがあります。一方、キャンパスを豊かにするというのは計画の仕方にかかっているとも言えます。これもインテリジェント化構想でずいぶん培われてきているから、かなり浸透していくでしょう。

佐川　それはもちろん発注側の姿勢もあるし、大学の姿勢もあります。設計事務所自身もそういう感覚が必要だと思いますが…。それから今度は“大学の施設自体が国民の財産であるという認識のもとに”という新しい視点が出ましたね。なかなかいい視点だと思います。そうすると施設を使う先生方も、使い方が変わってくると思うのです。

長倉　そう、自分の研究室は、つまり自分のテリトリーは使用しないで持っているだけというのも中にはあるのです。それを大学全体で使い方を考えるという方向にどう持っていったらいいかなど、意見交換をずいぶんしました。

佐川　自分のテリトリーの中で老朽化したものは、当然国が改善してくれると考えていましたからね。

長倉　自分のために、でしょう。大学のためじゃない。

佐川　そういうものの意識変革が確かに必要でしょうね。

大学病院は運営を考えた施設づくりを

佐川　大学建設の中でも大学病院の今後のあり方についてはいかがでしょうか。

吉沢　大学病院は高度先進医療のために存在価値があるわけですが、現在、私立も国立も施設が相当老朽化、陳腐化しているので再開発が進んでいます。ほとんどの古い大学病院はこの1、2年で再開発に着手し、これから変わっていくのだろうと思っています。大学病院が地域の中核的な病院であるという位置づけなので、先進医療に対応した施設に変えていかなければいけないと考えています。昭和30年代頃から「中央診療システムによる病院建築」が整備されましたが、あれを今ちょうど改築する時期がきたのです。そこで、また同じような病院づくりをしていいのかと個人的には思っています。やはり今度はもっと違った面で、FMというか、そういう面で見た病院づくりが必要ではないのかなと。一つの例で言えば、東大の病院も今改築が進行中ですが、外来診療棟ができ上がった後に高い評価を得ているのは建築面だけではなく管理、運営面とのタイアップが非常にうまくいったからだと考えられます。今後は運営を考えた病院づくりをしていくことが必要だと思っています。

写真2：東京医科歯科大学（P.26）

写真3：九州大学医学部附属病院（P.32）

佐川　同じような病院で、例えば、この特集の教育施設研究所が設計した東京医科歯科大学の病院（写真2／本誌P.26）は、まさに都市の真ん中に建つ病院として、17階建の高層病院ができました。運営面なども考えた設計ということでやったはずですが、それに対する評価はどうでしょうか。

吉沢　お茶ノ水駅を下りてお茶ノ水橋から見ると分かるように、新しくなった病院のビルの手前に古い建物が立ちふさがっているため、まだ評価できない面があるかも知れませんが、もう少し経ちますと全面新しい病院になります。都市型の大学病院のあり方が相当研究されていますから、そのいい面が出てくるのではないかと思います。

佐川　今度はまた、九州大学の医学部附属病院（写真3／本誌P.32）の改築が病棟から始まるということなのですが、あれも教育施設研究所の設計でしたね。

吉沢　九州大学も平成9年度から着手しました。この附属病院は昔の建物を建て替えるということではなく、ちょっと違ってきているのは、高層化をしていかざるを得ない敷地状況であるということです。高層化したときに、病棟病院という特徴が色濃く出た病院づくりがされるのではないかと思います。現在病棟を建てていますが、その中に中診を組み込む。それは都市型の医科歯科大学と似ているものですが、病棟で検査から薬剤から手術までを可能にするような施設ができるのです。これは現在、進行中です。

佐川　それは楽しみですね。

長倉　高層化が逆にうまく働いて、中診と病棟が離れていたのが近づけられることになった。あれを4階建の標準設計でやると、どうしてもクラスターのようになってしまいます。

佐川　そうでしょうね。

長倉　東大などはうまくいった例ですね。よく、吉武泰水先生が使われ方に関する研究ということをおっしゃっていましたが、FMというのは一種の使われ方を反映させることでしょう。その際たくさんの人が計画や設計に参与してやらないと駄目ですね。大学病院だけではなくて、大学や小学校、中学校もみんな同じで要求を出せる人がたくさんいるわけです。だからこそ文教施設の計画は難しくなる。けれどもそれは避けて通れない。もう一つ、再開発の場合、古いものを使いながら直すという仕事は大学病院など最たるものでしょうが、どういう手順でどういうふうにやるかなど、大変大切なことでいくつか事例もできてきましたが、そういう計画の仕方を指導する必要があるのではと思います。いろいろなことをどうさばいてできたかという事例は、みんなが聞きたいところでしょう。

佐川　できた結果だけでは分からないですからね。

長倉　そのあたりがおそらく文教施設部や教育施設研究所の苦労のしどころでしょうからね。

佐川　長倉先生のおっしゃる通り、小・中学校から大学、大学病院まで、設計においてはFMを取り入れるなど使われる人々の英知を集めたトータルな設計が大切だと思いますので、文教施設部ではこれらの推進のために、吉沢さんには全国の大学へ率先して指導に当たっていただきたいと思います。また、実際の設計をしている教育施設研究所は、文教施設部の先輩の方々が興した設計事務所であり、文教施設部とともに歩んできた経緯もあり、本日話題になりましたことについてもオーソリティですので、設計を通じて今後の文教施設のより良い進展にさらに寄与していただくことを期待して、本日の鼎談を終わりたいと思います。本日はお忙しいなか、貴重なお話をいただきありがとうございました。